

# WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

**10**  
2023  
October  
No. 528



第45回理事会に先立ち神戸ムスリムモスクを正式参拝（兵庫・神戸）

こころの扉—「アジアの精神性を大切にすACRPへ」 デスモンド・カーヒル	2
第45回理事会	3
2023年トルコ・シリア大地震オンライン学習会を開催	4~5
声明文「G7広島サミットを振り返って」を発表	6
平和研究所 第6回研究会	7
WCRPジャパニーズトラスティーズ 第3回学習会開催	7
韓国で「地球市民会議のための宗教間連合会議」開催 ACRP篠原事務総長が出席	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



## 「アジアの精神性を大切にする ACRP へ」

ACRPは現在、アジア・太平洋地域における22カ国において諸宗教のネットワークが存在しております。ACRPは、1976年シンガポールで開催された第1回ACRP大会を契機として創設されました。アジアの精神性を大切にし、それぞれの宗教が持つ叡智を結集し、紛争和解や人道支援、軍縮などの平和構築を行っております。

WCRP日本委員会は現在、ACRPの事務局を担っており、ACRPの様々な活動の原動力となっております。

和 平 者 宗 教 者 平 和  
長 議 議 議 議 議  
（ A C R P ）  
ア ジ ア 宗 教 者 平 和  
会 議 務 議 議 議  
実 務 議 議 議

デスモンド・  
カーヒル



す。2021年には、東京で第9回ACRP大会が開かれましたが、大会史上初めてとなる、会場とオンラインのハイブリット形式で開催。大会を日本の多くのスタッフの協力で大成功のうちに開催することができました。さらに、この大会でACRP活動の中心であるフラッグシップ・プロジェクトの事業費に3000万円もの財的支援をしてくださいました。ACRP創設以来、WCRP日本委員会は長年にわたってアジアにおける諸宗教対話・協力活動を積極的なリーダーシップで牽引してくださっております。

す。ここに改めて、日本の宗教者の皆さんに、ACRPへの多大なご協力に対し、心より御礼申し上げます。

私は、宗教コミュニティと宗教指導者は、危機に直面している弱い立場にある人々に耳を傾け、寄り添い、支援し、共に生きていくことにこそ、その役割があると信じております。それは、移住者、難民、無国籍者として到着した人々に精神的・スピリチュアルなケアに奉仕することであり、また、女性や子どもたちの保護と教育に特別な責任を持ち、必要な行動を実施することです。そして、人種差別や社会的・身体的ネグレクトによって人々の幸福や人権を損なうことを防止する教育を、自らの宗教コミュニティで行い、それを広く社会全体に浸透させることです。

こうしたことを実践する私たちアジアの宗教者には、アジア特有のスピリチュアリティが存在していると信じております。それは深遠なる真理の探求、沈黙の重要性への認識、執着からの離脱、非暴力の実施、正直さの実践、自然との一体性への深い理解などが特徴としてあげられます。私は、このスピリチュアリティをACRP活動の中心に置きたいと考えております。このスピリチュアリティこそが、これからの不安定な世界において、最も必要とされる人間の精神性であると確信しているからです。

ACRPは、2026年で50周年を迎えます。またこの年には第10回目のACRP大会の開催が予定されております。この2026年を節目として、真にアジアと世界の平和実現に向け新たなACRP活動を展開していく予定です。引き続き、日本の皆様にACRPに対するご支援をお願い申し上げます。

## 第45回理事会

第45回理事会が9月13日、神戸ムスリムモスク（兵庫県神戸市）でオンラインを併用して開催された。理事20人が出席し、「日本委員会人事」「ウクライナ情勢に対する支援」「G7広島サミット後のWCRP日本委員会声明」「AI倫理のための国際会合」「IPCR国際セミナー2023」「タスクフォースの再編」「第27回評議員会開催について」を審議し、

すべて可決された。



モスクの外観



モスク内を参拝

会議に先立ち、理事、監事一行は神戸ムスリムモスクの礼拝堂を見学し、モスクの由緒について説明を受けた。

理事会の冒頭、受け入れ教団を代表して神戸ムスリムモスクの安住ナヴィード副理事長があいさつした。「ウクライナ

ナ情勢に対する支援」では、第2回東京平和円卓会議について議論された。2022年9月に開催された第1回東京平和円卓会議では、14カ国の宗教指導者や政府関係者らが集い、紛争下における宗教者の役割や対話の重要性について議論された。第1回東京平和円卓会議の成果を引き継ぎ、第2回東京平和円卓会議を2024年2月18日から22日に都内で開催することが可決した。参加者にはウクライナ、ロシアの宗教者その他、中南米やアジアの紛争下の宗教指導者を招聘し、オンラインも併用して会議を開催することが予定される。

要性について話し合うもの。キリスト教、ユダヤ教、イスラーム、アジアの諸宗教指導者らが集い、AI倫理について議論することを予定している。

「IPCR国際セミナー2023」では、12月6日から8日に神戸市内の宗教施設で宗教平和国際事業団（IPCR）国際セミナー2023が開催されることが決定した。日本での同セミナー開催は4年ぶり4回目。コロナ禍でオンライン開催が続き、2022年度は一部対面でセミナーが開催されたが、今年度は、中国、韓国の宗教者や学者らが対面で集う予定。

「AI倫理のための国際会合」では、2024年7月8日から11日に広島市内で同会合が開催されることが可決した。これは、2020年2月にローマ教皇庁生命アカデミーが署名した「AI倫理のためのローマの呼びかけ」を受けて、アジアや日本の

「タスクフォースの再編」では、2024年以降のタスクフォースの刷新や継続について今後議論をしていくことが可決した。報告事項では、理事長業務執行状況、2023年度年間予定、会員、国際委員会、アジア宗教者平和会議、難民支援、特別事業部門、常設機関からの報告が行われた。

諸宗教の観点から、発展がめざましい現在のデジタルイノベーションについて認識し、AI（人工知能）に対する倫理的アプローチの必

日本委員会人事で選任された役員は次の通り。（敬称略）

青年部会幹事（理事会で選任）

退任…小林隆真（比叡山延暦寺阿弥陀堂 執事）

執事）

就任…山本賢潤（比叡山延暦寺教化部主事）  
気候危機タスクフォース（理事会で選任）

退任…小林隆真（比叡山延暦寺阿弥陀堂 執事）

執事）

就任…山口弘湛（比叡山延暦寺管理部主事）



理事会の様子

## 2023年トルコ・シリア大地震 オンライン学習会を開催

災害対応タスクフォースは9月9日、『2023年トルコ・シリア大地震——支援の現状と課題、そしてこれから』をテーマにオンライン学習会を開催、60人が参加した。今年2月6日にトルコ南部を襲った地震によって、隣接するシリアと合わせ、把握されているだけでも死者は5万7千人以上、350万人を超える人びとが避難生活を余儀なくされているという。地震発生から7カ月が経過し、WCRP日本委員会の今後の支援活動の在り方を模索するため、現地で支援活動に取り組む団体から、被災地および支援活動の現状を報告してもらった。

学習会では、はじめに同タスクフォースの黒住宗道責任者（黒住教教主）が開会があいさつ。そのあと第1部・報告として、WCRP日本委員会の篠原祥哲事務局長がコーディネータを務める中、まず同日本委員会事務局の安勝熙・平和推進部長が、日本委員会におけるトルコ・シリア大地震へ

の支援活動を報告。日本委員会がめざす震災への対応は、①「失われたいのち」への追悼と鎮魂②「今を生きるいのち」への連帯③「これからのいのち」への責任——と語り、これまでに4940万9305円の寄付が寄せられ、1769万2000円が国内外八つの団体を通して支援を行ったと語った。

次に「Under Organization for Cooperation and Development（オンダー協力開発機構）」のプログラム・マネージャーを務めるナジブ・ダダム氏が、シリア北西部における支援活動を紹介。ダダム氏は、①学校や教育施設の復旧と児童・生徒の復学②清潔で安全な水源確保③道路の復旧——をめぐらしているとした。

また、シリアでは、12年間に及ぶ内戦が続く中、約300万人の避難民が暮らして



ナジブ・ダダム氏

いたトルコ国境に接するアレツポ県が最大の被害を受け、住宅、交通網、

農業分野の被害が大きいという。とくに被災した子どもたちの教育支援を行っているが、上下水道が地震によって破壊され、衛生状況が悪化したことでコレラが発生。上下水道復旧のために必要な資材の高騰はもちろん物価も上がる中、被災地に暮らし家族を守りながらプロジェクトを進めるスタッフの困難な状況を語った。

「難民を助ける会」のトルコ駐在代表を務める景平義文氏は、シリア難民への支援活動を行っているところに地震が発生したと当時を振り返った。

被災し倒壊した自宅を追われた人びとは、大きく分けると政府の用意する公式サイト（避難所）と、そうではない非公式サイトに暮らしている。公式サイトには電気が引かれクーラーが設置されたコンテナが設置されているが、非公式サイトは小規模で、テント



景平義文氏

暮らしているところも多いう。農村部では、倒壊した自宅の



大野木雄樹氏

生活状況に置かれてい  
る。大野木  
氏らは県と  
の連携のも  
と食料やガ  
スポンベな

生活状況に置かれてい  
る。大野木  
氏らは県と  
の連携のも  
と食料やガ  
スポンベな  
校が再開され、子どもたちに筆記用具や本、  
ランドセルや学生カバン、さらには、レク  
リエーションになる道具などを届けたいと  
語った。子どもたちが学びの意欲を取り戻  
すための大きな力になるからだという。

同タスクフォースは、10月23日から29日  
にかけて、被災地であるトルコ南東部ガジ  
アンテプに現地調査隊を派遣する。11月号  
で報告する予定。

庭にテントを設置して暮らしたり、市街地  
にある公式サイトに移ることを希望しない  
人が多い。理由は、多くの世帯が農業を生  
業としており、公式サイトに移ると農業を  
続けることができなくなるためだという。  
また、被害の大きかった村では、村を再  
建するのではなく、別の場所に新しい村を  
建設し移住することが進められている。支  
援活動をしている景平さんたちは、とくに  
支援が届きにくい農村部で食料と衛生用品  
などの配布を続けていると語った。  
「パルシック」トルコ事務所代表の大野木  
雄樹氏は、カフラマンマラシュ県で地元行  
政府と連携し行っている生活困窮世帯への  
支援活動を報告した。

どの生活必需品の配布を支援している。ま  
た、村落部の農家では、2階建ての家屋で  
は住民が2階で暮らし、1階で家畜を飼っ  
ていることが多い。家が全壊した場合、人  
はテントで暮らせるが家畜のシェルターは  
ない。マイナス20度にもなる冬を迎える中、  
越冬支援が求められていると訴えた。  
さらに、提携団体を通して支援活動を行  
っているシリア北部において、WC RP日  
本委員会の寄付金を活用し、一つのキャン  
プ435世帯(2477人)に、パスタ、  
油、缶詰などの入った食料セットが届けら  
れたと報告した。

景平氏は、短期的には衣料品や暖房器具  
などが必要になるが、中・長期的な視点も  
必要で、被災地域の人びとが自立した生活  
を取り戻すために必要な支援とは何かを常  
に考え、実行することが重要だと述べた。  
大野木氏は、震災を経て、トルコ国内で  
シリア人に対する差別が顕在化しつつあ  
り、シリア人スタッフに対する嫌がらせを  
心配していると語った。流ちょうなトルコ  
語を話すシリア人が、被災し困っているト  
ルコ人を訪問し支援するような出会いと対  
話を重ねることで、復興、さらには平和に  
つながっていくのではないかというビジョ  
ンを得たと述べた。今後も地道に支援を続  
けることが大切だと語った。  
その後、参加者も交えた意見交換が行わ  
れたあと、同タスクフォースの力久道臣委  
員(善隣教教主)が閉会あいさつを述べ終  
了した。



## 声明文

### 「G7広島サミットを振り返って」 を発表——大臣政務官に手渡す——

WCRP日本委員会は9月13日、広島で5月に開催されたG7広島サミットを受けて、声明文「G7広島サミットを振り返って」を発表した。この声明文は10月12日、外務省において戸松義晴理事長より高村正大・外務大臣政務官に手渡された。

### 「G7広島サミットを振り返って」

WCRP日本委員会は、本年5月15日、広島で開催された主要7カ国首脳会議（G7サミット）に対する、「G7サミットに向けた宗教者提言」『ヒロシマの心』が導く持続可能な平和をめざして』を総理官邸にて岸田文雄総理に直接手渡し、世界の諸課題の解決に向けた宗教者の要望を伝えた。

この度のサミットを振り返ると、G7サミットが広島で開催され、7カ国首脳が原爆慰霊碑で祈りを捧げ、原爆資料館を見学し、被爆者の方々と対話を実現したことは、歴史的に意義深いことであった。また、G7首脳が原爆資料館で記帳を行い、それが個人的な願いであっても、平和のメッセージを世界に向けて発信したことには、一筋の光を見ることができた。それは広島の中で、被爆の実相を知ったからこそであり、「ヒロシマの心」を受け止めたものとして理解する。このことによって世界の関心を広島に向けさせ、核兵器廃絶への機運をより高めたのは確かである。

である。

WCRP日本委員会が岸田総理に提言文を手交した時にも、総理が強調して言及していたのが「法の支配」であった。ロシアによるウクライナ侵攻によって国際社会における原則やルールが揺らいでいる現状を考慮すると、政治的な意味合いが多分にあるにせよ、「法の支配」の厳守は時宜に即したテーマであったといえよう。このことは、「大小を問わず全ての国の利益のため、国連憲章を尊重しつつ、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序を堅持し、強化する」と首脳宣言で示されることとなった。

私たちが特に注目するのは、その宣言に、「大小を問わず全ての国の利益のため」という言葉が用いられたことである。今回のサミットでは、G7国以外にも多様な国が招待され、サミット期間中の半分の時間がグローバルサウスとの関係作りに費やされた。WCRP日本委員会は上記「提言」の中で、気候変動、SDGs、経済格差の問題にG7が責任を持って取り組むように要請したが、その際、強調したのがグローバルサウスとの連帯の強化である。今回のサミットで、G7で初めてとなるグローバルサウスとの共同の試みがなされたことは、評価に値する。

しかし残念ながら、私たちの提言文に関連して、いくつかの課題があることも指摘せざるを得ない。第一に、「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」において核兵器廃絶への意志が全く見られず、むしろ核抑止論を正当化し、核兵器保有の維持を被爆地で認めてしまったことである。核兵器の悲惨さを実感しながらも、核兵器の存在を認めるという矛盾した姿勢を見せてしまったことに、遺憾の意を表せざるを得ない。第二に、ウクライナ情勢に関して、ウクライナへの軍事支援とロシアへの制裁強化の議論に終始したことで、敵味方を明確にし、対立をさらに

深める流れになったことである。戦争終結への大局的な道筋や事態解決に向けた対話や和解への努力に関するメッセージが見えなかったことは、残念である。力と力の対立を強めるだけでなく、G7として停戦や平和構築に向けた外交努力を忘れてはならない。第三に、非倫理的とも言える異常な経済格差の是正に向けた、具体的なコミットメントの表明がなかったことである。「大小を問わずすべての国の利益」を体現するならば、G7は当事者意識を持ち、債務再編などの国際的な経済対策に積極的な姿勢を見せるべきである。第四に、信教の自由が世界的に脅かされている現状に関する議論が、全くなかったことである。信教の自由、さらには表現の自由や言論の自由といった基本的人権の保護に関するG7の関心は、十分に示されたとは言いがたい。

このサミットにおいて買われたテーマである「法の支配」は、今後、G7の理念の一つの軸となるであろう。そうであるならば、核兵器を包括的に廃絶に導く厳然とした国際法である核兵器禁止条約への尊重の姿勢を示すべきである。

「他者と自己の幸福は本質的に共有されるものであり」、すべての人々が「つながりあういのち」で存在しているという信念を持つ私たちWCRPは、ただ理想を説いているのではない。人類が滅亡の淵に近づかないように、神仏の教えに照らし、人間の本来のあるべき姿を示し続けたいと願っているのである。WCRPは引き続き、G7広島サミットで合意した内容が世界の恒久平和を願う「ヒロシマの心」の実現に着実につながるよう、G7各国の動向に関心を寄せ続け、かつ私たち宗教者自身の平和に対する責務を果たしていく所存である。

2023（令和5）年9月13日  
（公財）世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会

## 平和研究所 第5回研究会

### 田辺寿一郎氏

平和研究所の第5回研究会が9月19日、専門メディアセンター（東京・杉並）でオンラインを併用し開催された。早稲田大学留学センターの田辺寿一郎講師が外部招聘講師として『ポストリベラルな平和論の考察・宗教的平和論によるリベラルな平和論の批判的考察』をテーマに発表した。

田辺講師はまず、紛争地域における平和構築について解説する中で「平和構築とは、平和創造と平和維持活動を土台として、紛争の構造的課題の解決と紛争当事者間の関係性の改善を行い、武力紛争後の社会を持続的社会へと変容させる事業である」と語った。そのうえで、「いま、リベラルな平和



早稲田大学田辺講師

構築への批判がある」とし、「それは西洋型のリベラルな平和の枠組みが、非西洋地域へそのまま持ち込まれたことだ」と述べた。

さらに、リベラルな平和論を否定しているのではなく、「ただそれがあたかも普遍的なものとして民族・文化・宗教・哲学などの多様性を置いて移行してしまったことに問題がある」と批判した。

そして、西洋型のリベラルな平和論に欠けているのが「人間の内面と心の平和の視点」であり、仏教の「慈愛」の精神を例に挙げながら「他者の苦しみを自己の苦しみとして感じる力と、さまざまな理由から社会で疎外されている人びとへの共感、それを改善していこうという行動力が大切なのではないか」と語った。

最後に、ポストリベラルな平和論には、「西洋型の視点への固執を超越して、非西洋の哲学や宗教との自由な対話を通じた新しい平和論やグローバルダイナミクスの創造」「異文化間的な国際関係論や平和研究を推進し、自己批判や自己変容の土台作り」が必要と述べた。

## WCRRP ジャパニーズトラスティーズ 第3回学習会開催

WCRRP ジャパニーズトラスティーズは9月10日、オンライン学習会を開催し、約80人が参加した。WCRRP 日本委員会の戸

松義晴理事長（浄土宗心光院住職）が『宗教界におけるWCRRPの意義／現代における宗教の役割』と題し講演を行った。

戸松理事長は、「エンゲイジド・ブッディズム（社会参画仏教）」と言われるが、仏教の慈悲・救いというものは、理念ではなく行動をともなつて人に伝わるもの。昨年のウクライナ情勢に対する取り組みをはじめとし、各タスクフォースのもと行うWCRRPの活動はとても重要であり、今後の宗教界のモデルになつてほしい」と期待を寄せた。

また、『サピエンス全史』（ユヴァル・ノア・ハラリ著）を引用しながら、科学と宗教に言及。「宗教は、生命の始まり―病氣―死に代表されるような人間の思い通りにならないことを解決してきたが、いまはほとんどのことを科学が解決できる。しかし、2015年の朝日新聞社が主催した『未来を語り合う』座談会で、将来まで残る職業の一つとして挙げられたのは僧侶であった。合理性や効率性というのはロボットやAI（人工知能）の得意とする分野だが、その対極にあるからということらしい。このような合理性や効率性ではかることのできない人の思いや願いを具体的なかたちにしていくことが、WCRRPの役割だ」と述べた。

## 韓国で「地球市民会議のための宗教 間連合会議」開催

### ACRRP篠原事務総長が出席

韓国のソウル市とイクサン市において「地球市民会議のための宗教間連合会議」が8月21日から23日まで開催され、アジア宗教者平和会議（ACRRP）の篠原祥哲事務総長、松井ケティ教授（清泉女子大学）、杉野恭一師（立正佼成会学林学長）が出席した。この会議は、圓佛教が主催し、韓国政府文化体育観光部、イクサン市などが後援。地球市民として気候変動などの地球規模の課題に対する行動について話し合った。とくに、宗教者による責務として、宗教が持つ社会的、道徳的な資源をいかに活用していくかについて議論された。

基調講演に立った潘基文（パン・ギムン）元国連事務総長は、地球温暖化の危機を訴え、宗教共同体が先頭にたつて環境対策を実施してほしいと呼びかけた。篠原事務総長は、日本と韓国の宗教者の連帯が国際平

和にとって不可欠であると語り、また課題解決に向けて2021年に発表された「WCRP日本委員会アジェンダ2030」の重要性を説いた。パネルディスカッションの中で松井教授は、平和教育の必要性を、杉野学長は青年期における徳行を積むことの意義について語った。

今後さらなる宗教対話・協力の促進とそれに基づく平和構築を推進するため、この会議を継続的に実施することになり、WCRP、ACRRPとの連携も一層促進されることとなる。

### 今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

#### 補結（ほゆい）

9月は酷暑の中、体調を崩すスタッフも多かったのですが、みんなで業務を補い合い、

助け合い（結IIゆい）、チームが一致団結した一カ月でした。

### WCRPの活動

#### 《10月》

6日 和解の教育タスクフォース第2回会合（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）

9日 女性部会「いのちに関する学習会」（オンライン開催）

10日 平和研究所第6回所員会議・研究会（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）

13日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」森の整備（埼玉・所沢）  
\*27日も同

26日 人身取引防止タスクフォース第2回会合（オンライン開催）

掲載内容の無断転載を禁ず。